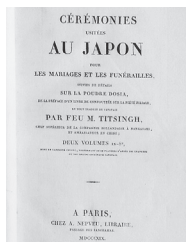
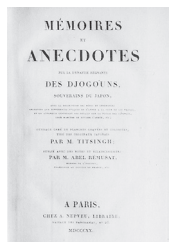


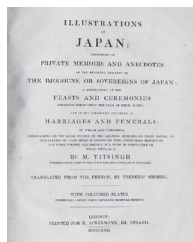
ティチングの著作（本学図書館所蔵）



『日本における
結婚と葬式の式典』
(パリ、1819年)



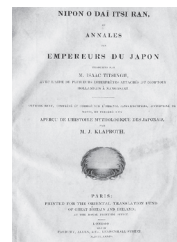
『歴代将軍譜』
(パリ、1820年)



『日本風俗図誌』
(ロンドン、1822年)



『日本の諸特徴』
(スラーフェンハーヘ、
1824～25年)



『日本王代一覧』
(パリ、1834年)

年には表明した東インド会社の退職希望が認められず、1795年にオランダ使節として清の北京で乾隆帝に拝謁するなど、重要な任務を果たしています。そして、翌1796年に念願の退職が承認され、イギリス船でロンドンまで戻ったのです。

オランダ本国とバタビアの混乱

この頃、オランダ本国はアメリカ独立戦争の影響を受けた国家間の対立に巻き込まれていました。特に、オランダがアメリカ独立軍を支援したことから、1780年には第四次対イギリス戦争が起これ、世界一の海運国としての繁栄を誇っていたオランダも劣勢状態を挽回できませんでした。殊に、アフリカ最南端の喜望峰の維持が危うくなった頃より東洋でもその煽りを受け、バタビアから長崎へ船を送ることさえ困難になっていました。

ティチングの三度に及ぶ長崎勤務は、彼の能力もさることながら、こうしたオランダの制海権の衰退によって、本国からの人的補充が無かったことも大きな要因であったと考えられます。

その後、オランダは1794年にもフランス革命軍の進入を受け、同軍に協力した国内のバタビア軍の攻撃で国王ウィレム5世はイギリスへ亡命しました。そして、翌1795年には国名もゲルマン系古代原住民バタヴィ族に由来するバタビア共和国となっています。

また、フランス皇帝となったナポレオンは1806年にこの共和国を廃し、オランダ王国として弟を国王に据えています。さらに、彼はオランダをフランスへ編入するなどの従属を強いる、彼の敗北後の1814年から1815年にかけて行われたウィーン会議において独立を回復するまで、オランダは苦難の道が続いていました。

ちなみに、東インド会社も経営不振からティチングが退職した4年後の1800年に解散され、東洋の根拠地バタビアは政府の管轄となりました。その後、1811年からイギリスのトーマス・ラッフルズによるジャワの武力占領を経て、1814年に蘭英間で結ばれたロンドン協定によって、バタビアはようやくオランダへ戻され直接国王が統治することになります。従って、1814年までの間、「出島の商館には当時世界でたった一ヶ所オランダ

国旗が掲揚されるというありさま」⁽³⁾ になっていました。

帰国後の執筆活動

ティチングがイギリスから帰国したのは、オランダがバタビア共和国を称していた1801年のことでした。約30年を東洋で過ごし、年齢は55歳を越えていましたが、東洋での収集資料を整理して研究者の道を歩もうとしていたようです。しかし、当時のオランダは研究生活を送れる環境ではなかったようで、パリに住居を構え日本や中国の歴史と社会についての原稿を執筆しています。この内、日本研究の原稿は17種⁽⁴⁾の存在が確認されており、それまでのヨーロッパの研究者が書かなかった詳細な観点から事物を捉えていたことから、後世に高い評価を残しています。

また、ティチングは当時のヨーロッパの東洋学者との情報交換も活発に行っていましたが、1812年に軽い病が手遅れとなり遂に帰らぬ人となりました。2年後のオランダの独立回復を見届けないままの、無念な最期であったようです。

しかし、彼が纏めた多くの原稿は知人や友人の努力で出版され（本頁上部写真＝オリジナル・タイトルを省略し日本語訳書名を記載）、また、未発行のものは大英図書館に収められて、ヨーロッパの人たちが江戸時代中期までの日本を知るうえで、貴重な資料になったのです。

◆註◆

- (1) 「歴代オランダ商館長と在留医師」（日蘭学会編『洋学史事典』付表3 雄松堂書店 昭和59年）によれば、この時期の商館長の再任は前例もあり、珍しいことではなかった。
- (2) 沼田次郎「蘭癖大名朽木昌綱のイザアク・ティチング宛書翰について」『日本歴史』第528号49頁 吉川弘文館 平成4年5月
- (3) 今来陸郎編『中欧史』（世界各国史7）第4編第8章 283頁 山川出版社 昭和45年
- (4) 沼田次郎訳『ティチング 日本風俗図誌』（新異国叢書7）483頁～486頁 雄松堂書店 昭和45年

おくまさよし（司書・図書館事務長兼管理運営課長）